

地域博物館における「見せる」

—横須賀市人文博物館における現状と課題—

大塚 眞 弘*

はじめに

毎年百にも及ぶ展示施設が全国に開設されていると聞く。その中で最も多数を占めるのは規模の大小は別にして、いわゆる「地域博物館」に分類される施設であろう。

筆者は1983年開館した横須賀市人文博物館に勤務する。この開館の際に経験したり、考えたりした事、また現在考えていることなどを中心に地域博物館における展示について、筆者の担当する考古部門を中心に述べたい。

1. 地域と博物館

—地域博物館の使命—

地域博物館は地域を緻密に調査研究し、その結果がより広範な地域の中でどのように位置づけられるかを比較研究し、展示その他の教育活動を通して客観的に地域の特性を指摘し、地域の将来を指向する指針とならなくてはならない。

博物館は基本的に「物」を通して学習する場、つまり「物」を観る場である。展示はある事柄を伝達するために「物」を構成して、ある時は「物」以外のものでそれらを連繋し、目で学習する機能と言えよう。

博物館が物を通しての学習の場であり、物の構成によって展示が造られる以上、物が無くては博物館にならない。そのためには、地

域に密着した調査研究事業と資料収集事業が必要だ。

このためにはまず地域に対しての調査研究が地域博物館において保証されなくてはならない。これには、博物館自らが地域を調査研究することと、他の者が行う地域についての調査研究の成果を正しく受け入れることがある。そして、他の者が地域で行う調査研究については、現時点における地域での問題点を指摘できるようにならなくてはならない。

また、いくら調査研究事業で成果が上がって地域の特性が把握できようが、物がなくては展示はできない。一方、物がたくさんあっても、その裏付けになる、調査のデータや研究の成果がなくてはただ物の列品であって、展示にならない。

だから、博物館における調査研究事業と資料収集事業は一体のものである。つまり、博物館における調査研究をおこなう学問は自ずと物をその対象とする領域が中心となる。

昨今の展示施設の開設のブームの中で、物の不足を模型や模造で補いながら—実際には模型や模造を中心にしながらという施設もある—展示を構成する施設もある。これは展示ではない。

もう一つは、地域博物館に限られた事柄ではないが、物の整理・保存である。

* 横須賀市人文博物館学芸員

これは、物を将来に伝え、子孫が展示や研究において現在と同じ遺存状態で観られることが最大の目的であるが、それとともに、①現代の研究者が研究のために、実見・撮影・採択等を行うこと、②展示資料が継続的に照明による光と熱を受けることによる代替えを行うこと、が挙げられよう。このため、博物館では物が減ることは絶対に無く、増加する一方である。だから、将来を見越した十分なスペースと物に適した環境を作り出せる資料室が必要となる。

2. 地域博物館の展示

—地域性と一般性—

地域博物館は、地域の特性を展示から指摘できなくてはならない。地域の特性とは、「おらが町の誇る物はこれ」式ではなく、日本列島全体とか全地球の中でなど、より広範な中での地域を客観的に見つけ、地域を位置付けることにより見出すものであろう。

かつて一或る所では現在も一、地域について周辺地域やより広い範囲との比較無しに、地域だけを語る展示を構成している施設があった。そこでは、地域の客観的な位置づけが無く、正しい理解なしに郷土愛の発揚だけが指向されているように思える。また、歴史においては、地域の生んだ有名人についてや行政的な変遷などに終始して、地域の大多数の人々の歴史がおざなりになることもある。

近年では反対に地域に対する緻密な調査・研究なしに、一般論の中に地域を当てはめ、地域史なしに、日本史を展示している場合もある。これらいずれもが地域の特性を表現するのに不適切である。最近造られる展示の多くは地域性より一般受けする説を採用しがちではなからうか。それによって、多くの展示がどこへ行っても（わざわざ遠方へ出掛けても）同じような説明をしている場合に出くわす。これは、ひとつには地域公立博物館の場合、市民が親しみをもち、市民が分かる展示

や学校教育における歴史教育の補助教材としての展示を期待されることにもあろう。そのため、地域博物館でありながら、地域性や地域の特色を表現することよりも、学校教育における歴史教育の補助教材として利用されるように、一般性を重視し、地域では存在しないであろう事象を模型・模造や遠方からの借用資料を駆使したり、地域にはあまり当てはまらない説を用い、展示を構成し、「日本史」を展示する。これは安易な「分かり易さ」であり、地域史を示したことはない。

一つの事柄について複数の説がある場合、一つの「説」がマスコミなどによって通説化しつつある場合、また担当学芸員の学問的見解が一般的な通説と異なる場合、特に公立博物館においてはいかにあるべきか、という問題もある。

この場合、一方では「任された担当学芸員の考えを前面に出せばいい。」と言う考え方ができよう。もう一方では「公共の施設であるのだから一般性を第一に考えるべきだ。」と言う考え方もできる。

筆者は横須賀市人文博物館の常設展においては、後者を指向することとした。それには、幾つかの理由がある。まずは、前述のとおり公共施設を私物化しないこと、ついで、「浅学の軽薄な知識と考えより」と言う考えなどによる。しかし、はずかしながらこの選択については確固たる考えは未だない。

考古学の成果を中心に、且つ考古資料を使った展示の場合、具体的に復元できる内容に乏しいことや、具体的に示すことによって表すことのできない他の説を黙殺してしまう場合にしばしば遭遇しよう。資料の表示についても然りである。「……式土器」「……形石器」「……形角器」などまったく物の機能を示さない言葉であり、これを表示してもあまり意味がない。では、かと言ってただ「土器」「石器」「角器」ではまったく意味がないし、また見ればわかることである。かつて

(1960年代末頃)、筆者が博物館学芸員養成過程で学んだアメリカにおける展示の現状や縄文時代の生活復元図製作への考え方などを思い廻らしながら、いざ自分で構想を練ろうと試行錯誤を繰り返しても、断片を集合させ、再構築していくということは、物の組み合わせ・用途など物の一つ一つを取ってもたいへんに困難なことである。このような場合、自分の学問の貧困さを痛切に感じるわけであるが、いかんともしがたい。

絶対年代では、現在においてはほぼ一般化しており、問題はほとんど無いと思われるが、地域史と日本史・世界史とのすりあわせをどのようにしていくかについては、絶対年代と文化内容にギャップがある場合、表示の仕方については考えさせられる。

近年、A V機器を展示に利用する博物館が急激に増加し、その利用方法も多岐にわたってきている。展示の教育効果をより高めるためには、あらゆる方法が採用されるべきであり、当然のことである。1970年開館の横須賀市自然博物館の展示においても、押しボタン等による映像や音声の設備も導入したが、故障が多く、現在ではほとんど撤去している。横須賀市人文博物館では、この反省と実物をよりじっくり観察してほしいとの考え(A V機器の利用を見ていると、内容の理解よりその機器の反応にばかり気が向いている場合が少なくない。)から、A V機器の使用を極力避けるよう計画した。しかし、現在ではA V機器の機種が多様化、利用方法が多様化、性能の高度化などがみられ、効果的な利用を再検討すべきと考え始めている。

3. 博物館の展示の実際

—横須賀市人文博物館における常設展—

いままでに述べた考えを踏まえて、横須賀市人文博物館での展示を企画製作したわけであるが、この実際を垣間見ていただきたい。

横須賀市人文博物館の常設展は三浦半島の

歴史を分かり易く展示することを目的に「三浦半島に生きた人たち」をテーマとし、946.22㎡に11の主題(第1図)から構成している。

この構成は必ずしも日本史の教科書通りの時代区分とはいかず、また、地域史の特性や地域研究・収集資料数の多少などにもより、一つ一つの主題の占地面積もまちまちである。

展示の製作にあたっては基本的に次の事に留意した。

- (1) 極力実物資料を使用する。
- (2) 三浦半島の歴史の流れを理解させる。
- (3) 歴史を支えていた人々の生活文化を主軸におく。
- (4) 学問の領域にこだわらない。
- (5) 児童・生徒にもわかる。

11の主題の概要と問題点を筆者が直接担当した、0～5までの主題部分を中心にのべる。

(0) イントロダクション

横須賀市人文博物館は横須賀市自然博物館に隣接・接続し、展示は三浦半島の自然史の後をうける形で導線が続く。一つの展示の流れの中で自然館の展示と人文館の展示をどう結び付けるかが問題になるわけである。結果は、第四紀の地層断面の剥ぎ取りとこの解説となる地史模式図および古人類のシルエットということになった。

(1) 三浦半島にヒトが住みついたところ

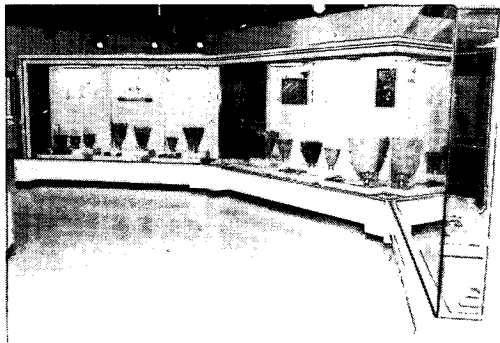
先土器文化を対象とする。三浦半島内では本格的な先土器文化の遺跡の発掘調査が無く、資料は他の調査の際偶然発掘された石器や表面採集による石片があるだけである。調査のデータは当然皆無である。

このため、古東京川を中心とした先土器時代の想定復元地図のパネルを用い当時の環境を説明することと、周辺地域から出土した代表的な先土器時代の石器を並べることとなった。

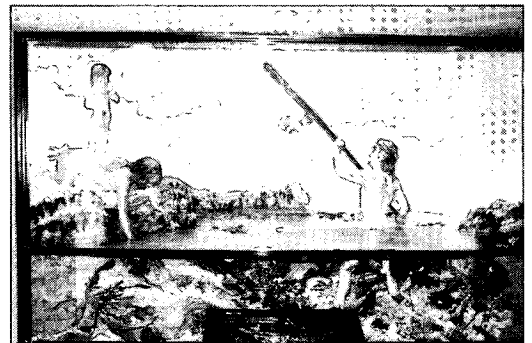
図1

展 示 構 成

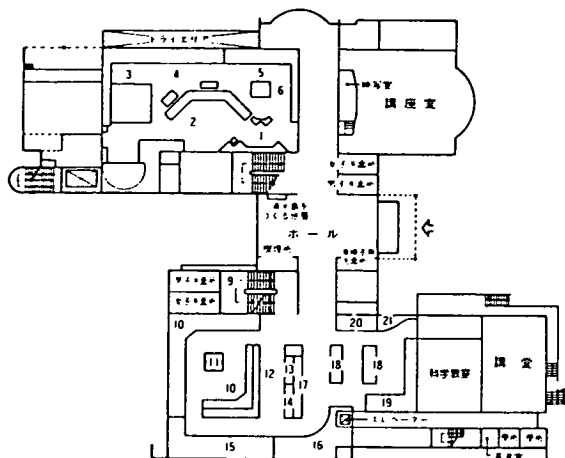
主 題	テーマ解説	サブテーマ解説	小 解 説
0. イントロダクション	0 ₁ . イントロダクション		
1. 三浦半島にヒトが住みついたころ	1 ₁ . 三浦半島にヒトが住みついたころ		
2. 採集の時代	2. 採集の時代	2 ₁ . 採集の時代	2 ₁₁ . 採集の生活 2 ₁₁₁ . 海の生活 2 ₁₂ . 採集生活の限界
3. 農耕のはじまり	3 ₁ . 農耕のはじまり		
4. 豪族の誕生	4 ₁ . 豪族の誕生		
5. 都と三浦半島	5 ₁ . 都と三浦半島		
6. 三浦一族と三浦半島	6 ₁ . 三浦一族と三浦半島	6 ₁₁ . 鎌倉幕府と三浦半島 6 ₁₂ . 戦国時代の中心新井城	
7. 江戸幕府と三浦半島	7 ₁ . 江戸幕府と三浦半島	7 ₁₁ . ウィリアム アダムスと浦賀 7 ₁₂ . 浦賀湊のにぎわい	
8. 村の暮らしと三浦半島	8 ₁ . 村の暮らしと三浦半島	8 ₁₁ . 沿岸の漁労生活《いわし(鰯)》 8 ₁₁₁ . 漁 船 8 ₁₁₂ . 粕小屋 8 ₁₁₃ . 漁家《りょうし百姓の家》 8 ₁₁₄ . ポッタ・マイワイ 8 ₁₂ . 沿岸の漁労生活《三浦蛸》 8 ₁₃ . 台地の農耕生活《三浦木綿》 8 ₁₄ . 台地の農耕生活《麦作り》	
9. ペリーの来航と三浦半島	9 ₁ . ペリーの来航と三浦半島		
10. 横須賀製鉄所の開設と三浦半島	10 ₁ . 横須賀製鉄所の開設と三浦半島		
11. 三浦半島の昨日・今日・明日	11 ₁ . 三浦半島の昨日・今日・明日		



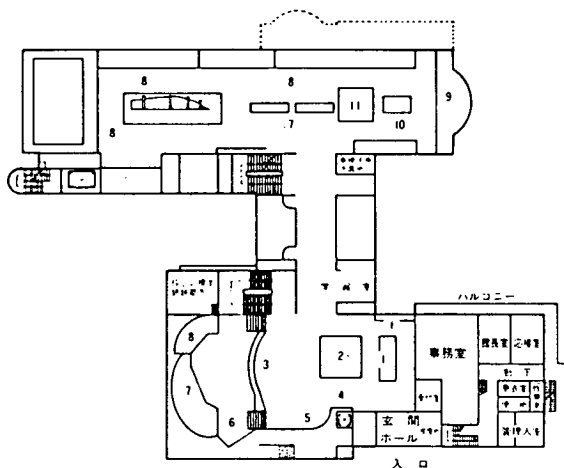
採集の時代



採集の時代ジオラマ（海の生活）



1階展示室平面図



2階展示室平面図

展示室解説

展示室〔自然〕

- ①ナウマン象
- ②三浦半島をとりまく地形
- ③空からの三浦半島
- ④大地は動く
- ⑤三浦半島のおたち
- ⑥干潟ができるまで
- ⑦三浦半島の森林 (ジオラマ)
- ⑧三浦半島の海岸 (ジオラマ)
- ⑨岩石壁面
- ⑩発光生物
- ⑪深海の生物
- ⑫昆虫類
- ⑬両生類
- ⑭は虫類
- ⑮鳥 類
- ⑯魚 類
- ⑰三浦半島の哺乳類

⑱海の生物

⑲植 物

⑳生命の歴史

㉑美しい石

珍しい標本・姉妹都市コーナー

ホール：三浦半島をつくる地層

展示室〔人文〕

1. 三浦半島にヒトが住みついたころ
2. 採集の時代
3. 農耕のはじまり
4. 豪族の誕生
5. 都と三浦半島
6. 三浦一族と三浦半島
7. 江戸幕府と三浦半島
8. 村の暮らしと三浦半島
9. ペリーの来航と三浦半島
10. 横須賀製鉄所の開設と三浦半島
11. 三浦半島の昨日・今日・明日

(2) 採集の時代

縄文文化を対象とする。このコーナーを構成するにあたって考慮すべきことは①他地域において低地の遺跡から植物性の遺物が検出されはじめたこと、②三浦半島の遺跡名を冠せた標識土器が多数あること、③後期後半以降の遺跡がないこと、であった。

①は遺物の組み合わせや環境・資源の利用など新たな知見が得られつつある時であり、且つ三浦半島においても低地の遺跡の調査が開始された時でもあった。しかし、現実には展示の製作までに考えがまとまらず、これらを度外視した結果となった。このため、現在となってはなるべく速やかに展示替えを実施したいと考えている。

②については、標識土器が多く、一時は三浦半島の縄文文化の研究史を中心としたコーナーを設けることも考えてはみたが、三浦半島の歴史を分かり易く通史で示す展示の中にいれるのはどうしてもなじまないことと考えた。しかし、土器はなるべく標識土器を復元し、展示に使い、他地域からの標識土器を見るために来館する見学者の便も図ろうとした。

③は、この時期遺跡が無いことをストレートに述べ、反対に他地域との比較からなぜ遺跡が無いのかを考えさせることとした。しかし、その後徐々にこの時期の遺物が発見されはじめ、良好な遺跡の発見・調査を行えば展示内容を大きく変更させる可能性もある。

また、三浦半島は多くの縄文土器の標識遺跡が存在し、三浦半島の遺跡や遺物を対象とした多くの論文が世に出ているわけであるが、いざ展示製作を行う段階で三浦半島では縄文時代の集落址の調査・研究がまったく無いことに気が付いた。これは、①・③とともに今後精力的に調査研究を進めなくてはならないことだ。

(3) 農耕のはじまり

ここでは、三浦半島の多くの弥生時代の集

落が古墳時代前期まで継続して営まれる、前期の古墳が存在しない、などの理由から弥生時代を中心に古墳時代前期までを扱った。

三浦半島ではまだ農耕具等の発見がないので、縄文文化と弥生文化の相違を具体的に述べるのは解説文だけになってしまった。

また、三浦半島には多くの海蝕洞窟に弥生時代以降の生活の跡が残されているが、海蝕洞窟での生活内容・海蝕洞窟遺跡と open site との関連等展示を行うにはまだ不明なことが多く具体的には示せなかった。

(4) 豪族の誕生

古墳とそれを支える人々の生活址の出土遺物の違い、大型古墳と三浦半島の古墳の大きさの違いを対照的に見て、支配・被支配間の相違を理解するように考えた。おおよそ、古墳時代後期から奈良時代に入るまでを対象とした。

(5) 都と三浦半島

ここでは、奈良・平安時代を扱い、律令制のもとでの新たな社会と庶民生活の実体を示そうとした。まだ、地域色を具体的に示すまでに研究が至っていないため、三浦半島内出土の資料を用いながらも、内容的には一般的になっている。

以上が筆者が直接担当した範囲である。これらを通して、

① 三浦半島においては赤星直忠博士を中心にして古くから考古学的研究がおこなわれ、且つ市立博物館が1954（昭和29）年から開設されていること（すでにその時点でも横須賀市教育研究所内に郷土文化研究室が設置されていて、地域の調査・研究が行われていた。だから、調査研究・収蔵資料ともそれなりのストックがあった）。

② 古くから考古学の調査研究がおこなわれていたため、三浦半島内出土の資料が他の地域まで散在していること、

③ 利根川の流れが霞ヶ浦に流出する近世まで、先土器時代以来の古東京川の流れとその

水流を基に三浦半島の地理的位置を考慮しながら歴史を考えるべきこと、
などを考えさせられた。

4. もう一つの物の学習

最近まで、博物館の利用一物を通しての学習一の形態は、一般市民が展示を見学することと、専門家が実物を理解するために実測や撮影をおこなうことと大きく二つに分類できてきた。しかし、すべての専門家は元一般市民であったことを考えれば、自ずとこの二つの間には学問の上で大きな隔たりがあることがわかる。

この二つの形態が今まで博物館の利用のされ方の中心であった理由として、一般市民にあっては、仕事以外に費やす時間がほとんどなかったことなどが挙げられよう。

しかし、多くの職場において休務日が増加したり、未就職人口（主に退職高齢者）が増加することによって、単に展示を見学するだけの市民から、より深く学習することを目的に博物館に来る市民が増加してきた。

筆者の勤務する横須賀市人文博物館においても、この二つの形態に属さない来館者が増加している。この新たな来館者たちは、博物館において、博物館主催の教育事業に参加する、同好が集って研究会をもつ、博物館の事業にボランティアとして働くなどさまざまである。これらの市民の活動の内に直接物を用いる行為が必要となる。

また、週休二日制が徐々に実施されてきているが、週休一日制の状態では休日是个々が体を休めるためだけで終わることが多からうが、週休二日では、もう一日を体を休める以外のために使う場合が増えよう。こう考えると、週休二日制の定着によって、この新たな来館者たちの急増が見込まれる。彼等には、

適切な指導を行う人が必要であり、展示室さえ開いていればいいという考えは通じなくなり、学芸員の存在意義は益々高まろう。そして、少人数が集まり研究会等ができるいくつもの小集会室や、ある施設ではすでに実施されている収蔵展示室も必要となってくる。

また、週休二日制のもとでは博物館職員も週休二日の権利をもつ。週休二日制下では、年間120数日の休務日がある。このような変化の時期にあって、いままでは、ほとんどの博物館が職員の休務日＝休館日であったが、これでは年間の3分の1が休館日となってしまう。そして、現在社会では、職業の専門化により、休務の曜日時間も多様化している。博物館には休んでいい日・いい時はなくなってしまう。これを解消するためには、交代勤務制しかない。

このように、週休二日制の定着・生涯学習運動の推進の時にあって、生涯学習運動は掛け声だけでは実りあるものにならない。具体的な対応策が至急必要である。

おわりに

考えたこと、気付いたことを取り留めもなく述べてきたが、展示の根本は学問の進捗とその理解であって、展示方法はこの学問の成果をどう示すかの技術である。そして、印刷物や映像による二次元の表現ではなく、私達現代人の感性によるニセ物ではなく、実物を見て学習することだろう。

また、終項で述べたように、第3の来館者達への対応が今後学芸員自身だけでなく、博物館の組織上・運営上大きな課題であろう。

引用・参考文献

田邊悟・大塚眞弘・安池尋幸 1983 「人文博物館展示解説」横須賀市博物館報No30